

2018年1月

## のれんの会計処理の検討—ASBJ「リサーチ・ペーパー」を中心に—

経営学部 経営学科 石田晴美ゼミ  
B4R11117 高橋 遼

### 【卒業論文概要】

のれんの会計処理は日本会計基準と国際会計基準とで大きな差異がある。日本では企業会計基準委員会（ASBJ）が2003年に公表した企業会計基準21号「企業結合に関する会計基準」に則り定期償却と減損処理を併用する形を採っている。これにたいし国際会計基準では、のれんの会計処理を2004年に国際財務報告基準（IFRS）が公表したIAS第36号「資産の減損」及び同第38号「無形資産」に則り定期的な減損テストと必要に応じて減損処理する形を採っている。日本は、なぜコンバージェンスの流れに乗らず、頑なにのれんの定期償却と減損処理の併用を押し通しているのだろうか。

本論文の目的はのれんの会計処理として定期償却と減損処理の併用と、減損処理のみのどちらが妥当なのかを検討することである。

本論文では、ASBJが、国際的な財務報告基準に関する議論のために策定・公表した「リサーチ・ペーパー」を中心に文献研究を行った。ASBJの「企業結合により生じたのれんは時間の経過とともに自己創設のれんに入れ替わる可能性があるため、定期償却が必要である」という主張は、妥当であると考えられる。しかし、すべての業種においてのれんを一律20年以内で償却することに合理的な根拠があるとはいえず、疑問が残ることを明らかにした。